

講演 「相互育ちと共生社会」～特別支援教育の立場から～ 要旨

佛教大学教育学部 准教授 菅原伸康

(はじめに)

みなさん、こんにちは。佛教大学教育学部の菅原です。先ほど紹介にありましたように、北海道網走市の出身です。今日のテーマは「相互育ちと共生社会」ということで、地域についてのお話をさせていただくのですが、私自身が田舎で生まれ育ったということも含めながら、進めさせていただこうと思います。

(教育の原点は相互育ち)

まず「育てる」ということについて、家庭で親が子どもを育てる、学校で先生が子どもたちを育てる、というだけでなくその逆もあると思います。つまり、子どもによって親が育てられるという視点があるでしょうし、先生方も子どもたちがいて教師として成長していくと考えることもできるのではないのでしょうか。私は、教育の原点とは、教える者と教えられる者の「相互育ち」であると考えています。大人は子どもと出会って係わることで、新たな視座を得ます。もちろん、その子どもたちの中には、障害のあるお子さんも含まれていますし、私自身も神奈川県にある国立久里浜養護学校というところでは、障害のあるお子さんたちに係わっていました。そういう経験からも、障害のある子どもさんと係わることによって、一人の大人としてもより成長していけるのかなと思っています。

(家族と相互育ち)

家族というものについて考えるときに、私が生まれ育った網走は、人口が3万いるかいないかという小さな町です。子どもの頃はあたり前のようにお父さん、お母さんがいて、おじいちゃん、おばあちゃんがいました。その中で、家族は相互に係わり合って育ち合っていた、つまり「子育て」をとおして家族のみんなが育っていました。

(分業化による相互育ちの機能の喪失)

ところが、近代はそうした家族のもつ機能を犠牲にすることで、家族みんながより効率的にふるまうことを可能にしてきました。学校の誕生により、子どもたちは家庭内での労働から解放され、職業と結びついた差別や偏見から救われました。また大人は、保育所の整備によって安心して働けるようになりました。老人施設の誕生は、一人暮らしのお年寄りに安心して生活できる環境を提供しました。

実はそうしたことが、人の成長に関しても分業化がなされているというところにつながってきます。昔は一つの家の中にいた、子どもたち、お父さん、お母さん、おじいちゃん、



おばあちゃんのそれぞれに学校や会社、老人施設という場ができ、そこでは教師が生徒に、上司が部下にというような一方向的な指導がなされてきました。そうして、それぞれの世代が機能的に生活できるようになりましたが、その中で相互育ちの機能が失われ同時に大人が育たなくなった、そういう家族が増えているのではないかと思います。

分業化は、学校でも見られます。学校の中には特別支援学校というのがありますし、小学校、中学校にも特別支援学級があって、そこには障害のある子どもさんたちが通っています。私は自身の経験からも、そういうお子さんたちからも何かしら学び得ることはたくさんあると思います。

（相互育ちの復権）

私は、今まで一方向的であったものを相互育ちの視点でとらえ直し、各世代間の垣根をなくしてそれぞれが相互に育ち合っている環境を復権していく、地域の中で世代別の機能追求を踏まえつつも子育てのもつ、家族みんなを育てるといった機能を回復していくことが必要だと思います。その部分に関して、人の生涯発達というところから、相互育ちの機能の喪失による弊害について、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

（生涯発達）

発達に関して0歳から20歳くらいまでは右肩上がり伸びていく、そしてその後は徐々に下がっていくという発達曲線がよく示されることがありますが、ある価値に基づいて個体内の変化を見ていくとき、ちがった意味での発達を考えてもいいのではないかと思います。ここからは、人は生涯にわたって発達し続ける。そういう視点に立って、話を進めていこうと思います。

まず、0歳から20歳までを子どもの発達と考えます。その先には、大人の発達があります。ここで、子どもの発達とはその子ども自身が大きくなっていくことであり、大人の発達とは関係の発達です。でも、その大人の発達もやがては下がっていきます。では、そこから発達はないのかというと、その先に老人の発達、生きることについての喜びを知り、隠居するという発達があると思います。そしてこれらは、子どもの発達が終わって大人の発達が始まり、老人の発達に切り替わるというものではなく、広いすそ野があってその上に生涯にわたって続いていくものだと思います。

（子どもの発達と相互育ちの喪失の弊害例①）

子どもの発達のところで、私は子どもにつけさせたい力を次の4つだと考えます。お母さんなど特定の大人との人間的なやりとりをとおして身につける相互性、そこでしっかりと信頼関係、愛着関係を作ることによって得られる、そこが自分の居場所であるという存在の確かさの感覚＝存在感、そこを拠点として自分で判断し意志を持って行動する体験＝能動性、その中でいろいろな活動をして学ぶ、そうして自分自身が作られていく＝自我です。

これは障害があるなしに拘らず、必要な力だと思います。私の教え子が府内の特別支援学校に勤めていますが、そうしたところで子どもたちは「先生と遊びたいから」「先生に会

いたいから」学校に行くというのが最初だと思うのです。そうやって、担任の先生との相互性をしっかり作っていく。そこから子どもたちは少しずつ動き出していくのだと思います。小手先のスキルばかりを追い求める人もいますが、それは間違いだと思います。

昔は家族が集まった地域の中で、様々な学びのモデルを見つけだすことができました。大人が集まって協働の作業をするのを見て、子どもは自然と交渉の仕方やその地域に根づいている文化を学んだわけです。近所の年齢の異なる者の集まりでは、年下の者は年上の者の活動を見ながら真似し、徐々に学びながら中心的な役割を担うということをしていきました。そういう地域での世代間の継承が自然になされていました。

ところが、現代は、近所で子どもたちが遊ぶ姿やお父さんとキャッチボールする姿が見られなくなりました。保育所等で、早い時期から集団で生活しているにもかかわらず、対人関係が苦手となり、協働で創造的な活動をするのができなくなってきました。最近では、学食で食事ができない学生もいます。トイレに入って一人で食事をしているのです。人と協働して何かをするとかコミュニケーションの苦手な子どもが増えてきています。特に異年齢集団で、遊ぶことが少なくなっていると思います。ですから、保育所のようなところで、意図的に異年齢を一緒にして遊ばせるようなところも増えてきました。

相互育ちの喪失の弊害例の一つ目として、責任感・存在感を確かめられない年上の子ども、自分をゆだね気軽に真似られない年下の子どもというのを挙げられると思います。

（異年齢の学び）

そこで大切になるのが、異年齢の活動です。異年齢の活動を通じて、関係性の面で年下の子は年上の子を信頼することの心地良さを学び、年上の子は自己の存在を確認することができます。また学びで、年下の子は真似ることで学び、年上の子は認識の再構造化をすることができます。

このことに係わって、「真似る」ということは特に障害のある子どもさんにとっては、とても大切な学びではないかと思います。学生にはいつも「分かる学び」と「真似る学び」があるという話をします。「真似る学び」について説明すると、人は何かを覚えようとするとき、そのしぐさを真似して覚えようとしています。これは理屈で分かってからはじめる学習ではありません。たとえば子どもたちがアイドルの真似をするように、とにかくやってみたい、なってみたいといった気持ちに支えられて始まる学習です。「真似る学び」とは対象の全体をまねて自分の中で組み立ててみることに主眼があり、真似をした部分に全体から見てどんな意味があるのかを考えるのは次の段階のことになります。まわりにいる先生方には、真似をした部分を上手に拾ってつなげてあげること、そうやって「真似る」ことが「分かる」ことになるよう導いてあげることが重要な仕事になります。そしてまた、真似ることは対象になってみることです。だから、対象の気持ちをなぞってみて、理解をすることでもあります。つまり、「真似る学び」によって、相手に対する理解が始まるということもあるのだと思います。

こういった学びを実践しているところがあります。私が勤めていた福井大学教育地域科

学部附属養護学校の選択活動の実践例ですが、小屋作り、校外活動、野外活動、料理活動、手芸活動を小学部の1年生から高等部の3年生までからなる縦割り集団で、1年間のスパンをとおして行っていました。年上の子どもたちは、年下の子に手取り足取り教えるわけです。そうやって、年上の子は自分が頼られていることを知り、存在する意義を確信していくわけですね。そうした狙いをもって、異学年活動を積極的に取り入れていました。

特別支援学校だけではなくて、こうした手法を取り入れる学校は増えています。年下の子どもたちは年上の子どもが活動をする様子を見て真似をして、活動の組み立て方、見通し、運営の仕方などを自然に学ぶわけです。そして、それをお年寄りが見守っていたりする。昔は、地域の中であたり前に見られたことですが、今はあまり見られなくなりました。このように、保育所や学校等で、異年齢の学びが経験できる機会を継続的に設定することが重要だと思います。そこに、おじいちゃん、おばあちゃんが自分の学校のように入ってくる。子どもたちのことも自分の孫のように思っている。このことは後で、老人の発達というところでお話したいと思います。

（学校の役割①）

昔の学校は地域社会とは距離をとり、身を立てるためにひたすら勉強をする場であったと思います。20年くらい前には受験戦争という言葉もありましたし、少しでも偏差値の高い大学に行けとお尻を叩かれた記憶のある人もいると思います。

これからの学校は、貧富、人種、性別、文化的相違などにかかわらず、お互いの違いを認め合った上で協働の活動を創り上げていく場、その中にはあたり前のように障害のある子どもさんもいらっしゃるわけですし、相互育ちというところにおいて、障害のある子どもたちとも係わることによって新しい視座を得る場、そんなふうには言えるのではないかと思います。

（大人の発達と相互育ちの喪失の弊害例②）

続いて、大人の発達についてお話したいと思います。先ほど、関係の発達と言いましたが、係わりをもつ他者とコミュニケーションが成立し、協働する中で自分自身だけではできなかったような事柄を成し遂げていくような発達、いわゆるネットワークを構築していく発達が大人の発達ではないかと思います。一人ではできない仕事でも、そこにいる仲間とコミュニケーションしながら、同じ目標、目的に向かっていく、そしてそのことを成し遂げる。そういう発達があると思います。

今は、お父さんが忙し過ぎて、子どもがお父さんの背中を見て育つということができない時代になってしまいました。私自身も、そのような状態であったことがあるのですが、たとえばお祭りのような地域の活動の場でも、子どもはお父さんが地域の大人と協働して何かを作り上げていく姿を見られなくなりました。また、仕事そのものに打ち込んでいる姿も見えにくくなりました。そのため子どもたちは、なかなか将来というものを描けなくなってしまったのではないかと、そんなふうにも思います。

ここで、相互育ちの喪失の弊害例の2つ目ですが、育たない親＝大人が家庭を顧みず、

仕事を中心とした関係しかもてなくなってしまうている。そして、アイデンティティが形成できない子どもが増えてきていると思います。

これはいくつかの研究グループで協働して、ある県の学校に依頼して行ったアンケートの結果なのですが、幼稚園、小学校低学年・中学年・高学年、中学校1年・2年・3年、高校2年の年代別になりたい職業を尋ねています。すると、男子の小学校高学年から高校2年までの1位が「わからない。」なんですね。数字を見ればわかるように、中学校2年・3年、高校2年では、圧倒的に高い数値になっています。女子を見ると、小学校高学年から中学校3年までが、やはり「わからない。」が1位になっています。ただ、高校2年になると「わからない。」という答えがなくなるのですが、こうしたところにも子どもが大人の姿を見て、将来を描くことができにくくなっているということが言えるのではないかと思います。現代の教育は、どれだけ効率よく大量の子どもを能力を引き出すことができるかという能力中心の視点が強く、協働の活動の中で培われるような関係としての発達がおろそかにされてきたのではないかと思います。

（父親の子育て参加）

少し、おもしろい取組をしているところがあります。福井県ですが、確か共働きが多い県だったと思います。「ここまでしないといけないか。」という気もするのですが、県内の小学校、中学校、高校が月1日の「放課後活動定休日」を設けて、部活動等の一切の活動を一齐に休止しています。同じ日に、「ノー残業デー」を設ける会社も出てきて、子どもと大人を同じ日に早く家に帰すところも出てきました。仕かけたのは福井県です。父親を家事や育児に参加させるのがねらいです。私は6年間を福井県で過ごしましたが、福井県はいろいろなことをやっています。文部科学省の全国学力調査では上位をキープしていますし、あまり表には出ませんが、スポーツの分野の調査についても毎年1位だったりもするのですね。

大人は、仕事が忙しすぎるあまり、「地域の交流」や「子育て仲間などとのネットワークづくり」を行うことで、「新たな自分」を発見し、「文化・社会の創造」へと駆り立てることが難しくなっていると思います。さきほどのお父さんの子育て参加というところですが、特に、障害のあるお子さんを育てていく場合には、本当にお父さんの役割が大切になると思います。今ちょうど大学で、後輩と二人で障害のある子どもさんを育てているお父さんお母さんから、今までの子育てのことを聞き取って、論文にまとめようとしているのですが、お父さんお母さんのインタビューの内容が全然違います。お父さんの方は、もう子どもさんは中学生なのに全然現実味がなくて、お母さんの方はここまで聞いていいのかというくらい詳しくたりします。そういう姿を見ると、やはり、お父さんの方は、仕事に打ち込み過ぎということもあるのかなと思います。

（学校の役割②）

地域の学校というものを考えたときに、働く大人が集い、子どもに自分を語り、世代をつなぎ、自らの仕事に責任と誇りを持っていく場として機能する必要性があるのではない

でしょうか。子どもたちがさまざまな大人と出会い、自らの将来を描く場にしていくのです。自分の父親以外のいろいろな大人とも出会い、将来を思い描けばいいわけです。

（老人の発達と相互育ちの喪失の弊害例③）

さて、ここからは私にとって未知の世界なのですが、老人の発達を考えていこうと思います。自分から離れ、より真実なもの、永遠なものに身をおくことを老人の発達と言えはいいのではないかと思うのですが、年をとると孫がかわいいという。これは、なぜかわいいのか理由など問われても答えようもないことです。そこに、生きがいというものを見つけるのだと思います。自分が愛しんできた者、その愛しんできた者に新しい芽がめばえ、それがまた育っていく、そして、孫を見ていると自身の命は短くなっていくのだが、大切なものが引き継がれ永遠に続いていくような安堵感を味わうことができるのではないかと思います。

先ほど、障害のあるお子さんを育てておられるお父さん、お母さんにインタビューをしたということをお話ししましたが、その中で、おじいちゃんが一人だけインタビューに答えてくれました。そのおじいちゃんのお孫さんは重度の障害で、お話をすることもできないし、その表情からは気持ちがわかりづらいというお子さんなのですが、おじいちゃんは「たくさん孫がいる中で、この子が一番かわいい。」と話してくれました。それを「どうしてですか。」と聞くのですが、「わからない。」とおっしゃいました。理由なんか聞かれても、わからないというのが本当のところだと思います。

今はひと昔前と違って、定年を迎える60歳くらいだと、まだひと踏ん張りしたい年齢だと思います。孫を見て楽しむこと以上に、仕事をしたいと思うおじいちゃん、おばあちゃんが増えてきているというのも事実だと思います。そうして年齢を重ねて、いざ孫を身近に見たいと思った頃には、孫はすっかり成長して憎まれ口を叩くような年齢になってしまっている。現代のおじいちゃん、おばあちゃんには、孫に代わる子どもたちが必要なのではないかと思います。

相互育ちの喪失の弊害例の3つ目ですが、隠居として育たない老人、老人と係われない幼児が増えていると思います。

（地域社会における老人の役割）

ある地域では、お年寄りがサロンを作っています。そこに子どもたちやその子どものお母さんたちが集まって来ます。そこには、おじいちゃん、おばあちゃんにとって、孫に代わる子どもたちがいるわけです。今は、子育てについて聞こうと思っても、自分の親は遠くに住んでいるということもあるでしょう。そんなときにこういうサロンに行けば、おじいちゃん、おばあちゃんがちゃんと教えてくれると思うのですね。へたな育児書を読むより、ずっと大切なことを教えてくれると思います。こういう場は、都会でも少し工夫をすればできると思います。また、都会ほどこういう施設が必要だとも思います。

今は、老人が子どもと係わる機会が奪われ、老人として成長できないでいるということがあると思います。また、おじいちゃん、おばあちゃんが両親に代わって子育てをしてい

て、両親が親として育たなくなっているということもあると思います。この場合、老人も隠居として育たなくなっているのです。地域の文化が継承されにくくなり、幼児が老人に身を委ねられないようなことになっています。昔は、ずい分父親や母親に叱られて、おじいちゃん、おばあちゃんのところに行ってなぐさめてもらうというようなこともありました。今は核家族が多く、子どもの逃げ場もないのかもしれませんが。

（学校の役割③）

これからは、学校がそういう役割を担ってもいいのではないかと思います。地域の老人が集い、子どもと一緒にいるお父さん、お母さんたちに自分を語り、地域文化が継承されていく場、子どもたちがさまざまな老人と出会い、身を委ねることができる場、そういう機能をもたせてもいいと思います。

（まとめ）

ここから、まとめとしていくつかお話をしていきたいと思います。

現代は、かつて地域にあった機能がどんどん失われていっています。地域は、子ども同士が家の周りで係わりあう機能、子どもが親の働く姿を見ながら生きがいを学ぶ機能、老人が子どもの元気な姿を見ながら老人として成長する機能を失ってしまいました。これを地域で復権させていくということが重要です。地域には障害のある子どもさんもいらっしゃいます。皆さんも耳にしたことがあると思いますが、発達障害ではないかと考えられるお子さんも6.5%いると言われています。たまたま、昨日読んでいた本にあったのですが、エリクソンという人がいます。発達心理学の分野で先駆的な役割を果たした人ですが、エリクソン自身の子どものさんの中にダウン症のお子さんがいらしたようです。当時、何十年も前ですけど、そうしたお子さんは強制的に施設に入れられて育てられました。今は、そんなことはまったくなくて、当たり前で家庭で生活し、学校に行くわけです。地域においてそうしたお子さんたちも当たり前のこととして交えて、共生社会というものを考えていかなければいけないのです。

その中で、支援されることが必要な障害のあるお子さんについて、どのようにして自分づくりの活動を行っていくのかということも考えなくてはなりません。自立や社会参加をどのようにサポートするのか、自らの意志と力で遂行することの中で、自力の限界を知り必要な援助支援を求めることも必要になってくる。これは、障害があってもなくても同じことが言えると思います。そして、活動に必要な物理的条件や制度的条件を整えること、これは行政の役割になってくると思います。

家族というものが中心にあって、お父さんの行く職場があり、子どもたちの学校や保育所がある。おじいちゃん、おばあちゃんには老人施設がある。それらを一つのユニットとして考えていく、それが本来の共生社会につながっていく。老人と子ども、子どもと大人、ここで子どもというのはあたり前のこととして障害のあるお子さんも含むわけですが、こうした関係が家庭内の関係にとどまるのではなく、地域を一つの家族のように有機的に連結していくユニットとして考えていくことが必要だだと思います。夫婦を中核とする家族

が、地域の中で福祉共同体を形成することがめざすところの共生社会だと思います。

発達を個体の成長としてとらえると、それは単線モデルであり、生きる喜びが増えるとか障害が克服できるとか、求められる力は自力解決する力です。それだけではなくてもう一つ、発達の社会参加モデルというものを考える必要があると思います。マザーベース、ファミリーベース、スクールベース、コミュニティベースのそれぞれの場で地域に出ていくことによって、個体が成長発達を遂げていく。ここで求められる力は、他者の援助を受けながら社会参加をする力です。今は、こちらの方が大きいのではないかと思います。生命活動の充実、生きることの喜び、そういうことですね。京都府教育振興プランというものがあるのですが、そこにはキャリア発達＝社会の中で役割を果たしながら自分らしい生き方を実現していくと書かれています。互いの違いを認識した上で社会における自分の役割を考え、いかにして協働の活動を組めるようになるかということ、それが相互障害の克服に繋がると思います。

自由競争社会においては与えられた目標に向かってたくましく競い合う力を求められていましたが、少子高齢化が進み共生社会の必要性が強調されるようになりました。学校においても、互いの違いを認めながら協働活動の中で目標を見出だしていく力が求められるようになったと思います。障害のある子どもさんもちろん同じです。特別支援学校において、キャリア教育とは障害が軽度の就職が可能なお子さんだけのものかということそうではない。障害が重いお子さんのキャリア発達をどう考えたらいいのか。そこでどういう教育を提供したらよいかを考えるのが先生の仕事だと思います。その子どもに合わせた自立を考え、教育の在り方考えるのも学校の役割です。

共生社会において、学校の果たすべき役割は変わってきていると思います。地域に開かれた社会資源としての学校になる。保護者が教育に参加する、子どもたちが地域の福祉や環境と出会う、老人が保育活動に参加する、異年齢集団の学び、子どもたちの真似る学び、そうした機能を備えた学校をめざすべきだと思います。それらを支援する地域に開かれた教員集団、相互学びのできる教員集団の育成も重要です。私は、子どもを変える前に教員が変わることが必要だろうと思います。

違いがあるということが相互育ちの前提です。違いのあるもの同士が、一つの地域の中で生きていくということが、本来の共生社会ではないかと思います。そこでは、特に障害のあるお子さんへのまわりの理解というものが重要だと思います。よく学生に言うことですが、バスに乗ったときに白杖をついている人に出会ったらどうするのか、あたり前のこととして「大丈夫ですか。」と声をかけ、必要であれば手を貸そうとするだろう。そうしたところから地域の中で、自然にお互いの違いが認められるようになるのではないのでしょうか。そういう社会ができてくればいいなと思いながらお話をさせてもらいました。